

動千百言以眩惑乎人之心目。求如漢文之近古以載道者。凡希。吁可悲哉。此文之所以難言也。

愚按。此語見于古文苑張琳序。近世稱古學古文者。往往中此病而不自知。張琳明成化中人。而其言如是。余有所感而抄出焉。古文苑。唐人編錄。莫識誰氏。其文間非眞手。疑以傳疑。史傳所不載。文選所不錄。固不能無意也。歌詩賦頌。爲體二十一言深意古。詞奧理著。千百年間。宋孫巨源。於佛書龜中得之。復出於人間云。

一、飛患の語の出典

飛患。遭飛語見拘云。劉歆遂初賦。釋叔何之飛患。見古文苑第五。

一、青地禮幹夢得の一句

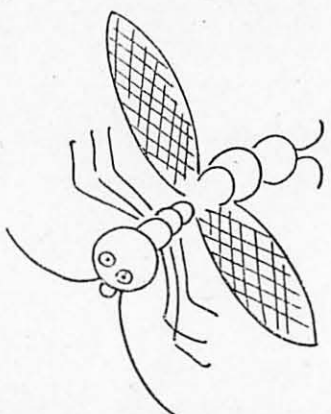
庚申閏七月十七日曉夢得の句。

年を経て花にまじはることしか

一、毒蟲發生と天災

江戸より久田清左衛門來狀の内。

頃日江戸へか様の虫出で、人をさし候へば即死いたし候。野田了佐と申坊主衆飼置候大二疋、右の蟲さし甚くるしみ死



申候。其仲間彼蟲を踏落申時足に取付候へば、忽甚痛出候由。其後紙面上り候て見申

候。長き紙面にて寫申間もなく、畢竟右の通に候。右仲間も其後死申由。本阿彌共罷出申候。是にははぶてかぶらをして、さし候所を撫候へば宜候由。松平伊豆守殿御城にて御聞、御歸候てはぶてかぶら御求候由に候。はぶてかぶらは、元來毒蟲を避申由にて、先年も外より恵み給候へ共、正眞に無之由に候。此度求候は内山覺仲見候て眞物と申間、少宛分ち進候間、此紙面は進候方より御返し候て、又外へ可被懸御目候。以上。

閏七月七日

久田清左衛門

久田氏來狀同月十八日到來。本藩の三州當五六月頃より、

ふと犬の死する事無際限候。煩付一二日の内に斃候。或は狂走し木石に齧付、或は人にも喰付候。喰はれ候人も甚疼候由、秋に至ても未止候。享保十七年西國蝗災有之前、牛馬犬猫夥敷斃れ候。其趣に似寄候。

去未年以來今年に至り、氣候の不順甚敷事、寒中無冰雪、當元朝は戸障子明置候ても暖氣に付扇子を用候。然處立春段々大雪に罷成、四月上旬迄雪有之候。五月梅雨無之、土用中冷氣汗出不申、七月中も同年閏七月に入候て暑熱を覺候。六月九日・廿日・閏七月朔日大雨。此大雨幾内・中國邊は甚敷事、越前・近江等溺死人其數無之候。米穀不積米價七八十星に及候。然處同月十六日晝頃至極の暴風雨起り、京都は上は鞍馬・貴船・賀茂等神社を初め破壊し、民家の潰るゝ事無際限、賀茂川兩岸に溢れ三條・五條兩橋危く、十七日迄往來無之。米價彌以湧貴し、白米石百二十匁に至り、大坂黒米一石百星に及候旨、大森氏來狀に云。

一、深山壺峰講書を命ぜらる

與力深山嘉右衛門、今年初て江戸御式臺御帳附に罷越。年五十有餘也。嘉右衛門醫者の子にて醫書に通じ、詩作器用

にて手跡も能く候。去月廿日佐藤守様御居宅、初て被爲召候て即席の詩作等被仰付候趣、新番村上源左衛門より廿三日書狀、八月三日到來如左。

深山嘉右衛門今度御居宅へ罷出、御用被仰付候儀、則樋口次郎右衛門を以て被仰渡、廿日暮頃初て御前へ罷出。兒島平十郎誘引いたし、於御前漢書の中可然所を申上候様に御意。則前漢河間獻王傳を讀申候。其後即席詩作も被仰付。則別紙の通に御座候。秋夜即興に御座候。尤御内々の趣に候へども、右詩作等も入御覽申度如斯御座候。平十郎儀嘉右衛門に左傳等承申管に付、以外學問精に入申候。第一御前御稽古烈敷、大形一日隔晩に御讀書御指南に罷出候。比日は又有澤采、右衛門も御前へ罷出、軍書御聞被遊候。兎角御馬御學問御好被遊候。半日も御休息被遊儀は無御座候。第一御壯健故と一同奉恭悅候。以上。

閏七月廿三日

村上源左衛門

青藤太夫様

八月四日便宜和韵一章、源左衛門迄遣之。

秋夜奉應教